

目的 教育系学生は、小学校の教諭になれば男女を問わず家庭科との関わりを持たざるを得ない。そのような学生に対し、せめて1日の家族の食事づくりを経験させるため、レポートを提出させた。その集計によって現代の学生の食事に関する知識・技術と明らかにした。

方法 調査対象は、教育系大学生3年生271名、調査時期は昭和56年度夏・冬である。レポートには食事に使った材料、料理名及び調理法等が記載しており、その内容をもとに男女別、自宅生・自宅外生及び季節性等の項目を集計した。

結果 ①副食数及び副食の種類については、男子より女子に比べて数も多く、種類も変化に富んでおり、従来いわれてきていることがそのまま現われ、一方、居住形態による差異は認められず、このことについては他人の介入が自宅生の場合多いことが影響していた。②使用材料の食品群別構成については、香川式4つの食品群をもとに朝・昼・夕食別に比較すると、1群は3食を通して摂られにくく、なかでも朝食で補おうとしている傾向があり、夕食では朝食や昼食に比べて使用食品群数の平均も多く副食数と相関があった。③自力度については、調理にどれだけの程度、自力で行なっているかと集計した結果、男子より女子に自力で行なった人が有意に多く、助言を得る調理は自宅外生より自宅生に多い傾向がみられ、日常生活における食事づくりの関与の多少が影響している事が示唆された。